

大通公園を望む窓辺から

新型コロナは
医療事情を変える

常任理事 山科 賢児

新型コロナの正体とワクチンの実態がやっと認知され、不安や過剰な反応は収まり、ようやく冷静な判断がなされるようになった。しかし新型コロナ流行時には発熱外来の医療機関の予約が取れない、発熱者はかかりつけ医といえども気軽には受診できない時期が続いた。新型コロナ診断のPCR検査と結果の判定までに時間がかかる状況も続き、医療現場は混乱した。公衆衛生の要の保健所は多忙で一時機能不全に陥り、日本の医療体制の脆さが露呈した。

流行時には街中で無料のPCR検査が行われ、ドラッグストアやインターネットで新型コロナの抗原検査キットを購入し、誰もが検査ができるようになった。今まで個人自らが診断のために検査し治療への活用は、一部を除き前例がなかった。

検査が自由化されたのは、新型コロナの感染の有無の迅速な判定を個人も社会も強く望んだのにも関わらず、医療機関が対応しきれなかった結果といえる。今後インフルエンザなどの抗原検査も医療機関を受診せず自ら行い、必要とあれば医療機関を受診する流れができるのだろうか。

診療形態についても新たな動きが見られ、患者が医療機関に向向く従来の対面診療の意義の見直しを迫られた。すでに訪問医療は医師が出向き患者が移動しない形として認められており、オンライン診療のお互いが移動しない診察の形はコロナ禍で威力を発揮し、今後その重要性は増し加速化されるだろう。

新型コロナは日本の医療体制の硬直化の現実もさらけ出した。患者を重症度別に振り分け、新型コロナが落ち着けば基礎疾患治療のためコロナ専用以外の医療機関に移動させるなど、入院ベッドを患者の実態に合わせて病院内や他の病院間で融通し合えない現在の医療提供体制は、残念ながら新型コロナに十分対応できたとは言えない。

新型コロナのパンデミックは、気づいていたが水面下に潜んでいた日本の医療制度の抱える既得権や規制の問題を浮上させ、今後の日本の医療事情を変える転換点となる。

オリンピックに思う

理事 しまだ みちろう
島田 道朗

この冬、コロナ禍の中、北京冬季オリンピックが開催されました。自粛中でもありテレビにかじりついていました。

50年前、札幌冬季オリンピックが開催された1972年の冬、私は高校受験直前で直接オリンピック会場では観戦できませんでしたが、スキーもスケートも得意だったので、勉強の合間にテレビを観ていたのを覚えています。当時はアマチュア規定が厳しく、オーストリアのアルペンスキーのスーパースターであったカール・シュランツ選手が札幌から追放されるというショッキングな出来事もありました。『シュランツはクナイスルで勝つ』というスキー板のコマーシャルに出演したからでした。この時は、そんなものかなと思いましたが、今では、一部の選手は大金持ちのプロフェッショナルで、アメリカのテレビ局の事情で人気競技が真夜中になるのが当たり前です。アマチュアリズムと商業主義の狭間でオリンピックは変貌してきました。昨年の夏の東京オリンピックも、7月から8月の猛暑の中開催され、マラソンが札幌で行われるという、超変則的なフィナーレでした。アメリカの人気スポーツが気候の良い秋にあるからだそうです。何かおかしいと思います。

同じ年、井上陽水の『人生が二度あれば』という曲がリリースされました。『父は今年二月で六十五 顔のシワはふえてゆくばかり 仕事に追われ この頃やっとゆとりができた・・・人生が二度あれば』曲の出だしですが、私も現在六十五歳です。仕事には疲れていますが、ゆとりはありません。まだまだ長生きしたいと思います。8年後の2030年に札幌オリンピックがあるなら、ぜひ会場で観たいと思っています。生きていけば、73歳になっています。足腰を鍛えるためにゴルフに励み、ボケないために運転免許証は返納しないで『駆けぬける歓び』を堪能したいと思っています。一度きりの人生を楽しみましょう。

